opusdei.org

# 新たなる〈地中海〉 (III): : 「右の手の傷 から……」

キリストの傷の中に入ること、すなわち、神の愛に触れさせ、苦しむ人々の中で神に触れること。観想と思いやりの道。

2020/07/03

## 3. 「右の手の傷から……

聖ヨハネは、イエスの復活の晩のことを、こう記しています。弟子たち

は集まっていたが、「ユダヤ人を恐 れて、自分たちのいる家の戸に鍵を かけていた」(ヨハネ20・19)。彼 らは怖くて、閉じこもっていたので す。「そこへ、イエスが来て真ん中 に立ち、『あなたがたに平和がある ように』と言われた。そう言って、 手と脇腹とをお見せになった」(ヨ ハネ20・19-20)。その瞬間、弟子 たちの不安は深い喜びに変わりまし た。彼らは主がもたらした平和を受 け入れたのです、そして後に、彼ら は聖霊の賜物を受けたのでした(ヨ ハネ20・20,22)。

福音書のこの場面には、気になることがいくつもあります。使徒たちは何を待っていたのでしょう? イエスが不意に彼らの前に現れ、彼らエスでと平和に満たされました。イエネの言葉や振る舞いについては、ますが、弟子たちを見るイエスの眼差しはどんなだったで

しょうか? 弟子たちはイエスを見捨 て、一人きりにしてしまいました。 怖じ気づいて逃げたのです。けれど も主は、そんな弟子たちを責めたり はしません。イエス自身が弟子たち にそのことを予告していました。そ の弱さから深い同心が生まれると 知っていたのです。受難の前にイエ スはペトロにこう言いました、「わ たしはあなたのために、信仰が無く ならないように祈った。だから、あ なたは立ち直ったら、兄弟たちを力 づけてやりなさい| (ルカ22・ 32)。今や悔い改めた弟子たちは、 神が与えてくださる愛をもっといっ ぱいに受け入れることができるよう になったのです。そうでなかった ら、ペトロをはじめとして、弟子た ちは相変わらず、自分の力に頼り続 けていたことでしょう。

ところで、なぜイエスは弟子たちに 手とわき腹を見せたのでしょう? お そらく十字架刑の跡がはっきりと

残っていたからでしょう。けれども 傷跡を見て、弟子たちは苦しみでは なく、むしろ平和に満たされまし た。拒否するのではなく、喜んだの です。よく考えるなら、釘の跡、槍 で突かれた跡は、神の愛のしるしな のです。これはさまざまな意味が込 められたしるしです。イエスは復活 後の自分の体に受難の傷跡が残るよ う望まれました、ほんのわずかでも 不信感を与えないようにするためで す。わたしたちの反応はしばしばい い加減で、ときには冷淡でさえある ことをよくご存じのイエスは、御自 分のなさったことを後悔したりはし ないのだということを、わたしたち がしっかりと理解するよう望まれた のです。キリストの愛は、揺るぎな い、すべてを見通される強い愛なの です。

さらに、信じようとしないトマスに とっても、傷跡は、復活の疑いよう もない証拠となるものでした。イエ

スは神の子であり、わたしたちの罪 のためにほんとうに死んで復活され たのです。フランシスコ教皇はこう 教えています。「イエスの傷は信仰 にとってつまずきですが、それはま た信仰を確かめるものでもありま す。そのため、復活したキリストの からだにおいて、傷はなくならない のです。なぜなら、この傷は、わた したちに対する神の愛の永遠のしる しだからです。それは、わたしたち が神を信じるために不可欠だからで す。それが不可欠なのは、神が存在 することを信じるためではなく、神 が愛であり、あわれみであり、忠実 なかたであることを信じるためで す。聖ペトロは、イザヤを引用しな がら、キリスト者にこう書き送りま す。《そのお受けになった傷によっ て、あなたがたはいやされました》 (1ペトロ2・24。イザヤ53・5参

照) 」 1。

霊的伝統によれば、主の傷は優しさ の源泉を示すものです。たとえば聖 ベルナルドはこう書いています。

「この開いた傷口から、わたしは岩 から野蜜を吸い、硬い岩から油を味 わうことができる(申命記32・13参 照)、つまり、主がどれほど優しい お方なのか、味わい、見ることがで きるのです」<sup>2</sup>。この傷のうちに、わ たしたちは主の限りない愛を認める のです。槍で突き刺された心臓から 聖霊の賜物が流れ出るのです。それ と同時に、主の傷は確かなれ場でも あります。この傷口の深みを発見す ることによって、わたしたちの内的 生活における新たなる〈地中海〉が 広がってゆくことでしょう。

## 「主の右手の聖なる傷」

「キリストの傷の中に入り込みなさい」とアビラの聖ヨハネは勧めています、「そこに彼の鳩がひそんでいます、素直に彼を探し求める霊魂

が」。「あなたの傷の中に、わたしを隠してください」と、よく知られた祈りにあります。聖ホセマリアも、キリスト者たちのあいだに深く根ざした、主に近づくこの方法を取り入れることになるでしょう。たとえば彼は1933年にこう書いています。「毎日、わたしのイエスの傷の中に入ること」。

これは聖ホセマリアが生涯を通じて もっていた信心のひとつで、彼に近 づいてきた青年たちにも勧めていた ことです⁵。とはいえこの信心は、ス ペイン内戦のさなか、彼がブルゴス に滞在していたとき、新たな広大な パノラマが目の前に開かれるという 経験によって、とくに大切なものと なりました。聖ホセマリアにとっ て、これはつらい時期でした。オプ ス・デイの子どもたちはスペイン中 ちりじりとなり、ある者は前線で戦 い、ある者はさまざまな場所に身を 隠し、またある者は宗教的迫害が猛

威を振るっている地域にまだとど まっていたのです。聖ホセマリアの 母、姉、弟もそうでした。それに、 彼の霊的娘たちの消息も途絶えたき りでした。そのうえ、彼に従ってい た者たちの中の幾人かは、戦争中に 死んでいました。

こうした状況のもとで、聖ホセマリアは祈りと努力とくに償いの精神をさらに強めるよう招かれているをしていました。しかし、1938年6月初め頃、博士論文のための調査研究でラス・ウェルガス修道院に受けたのです。彼はそのことを、そのようなにホアン・ヒメネス・バルガスにあてた手紙でこう書いています。

「ホアニート、今朝、ラス・ウエルガスに祈りに行く途中で、新たなる〈地中海〉を発見しました。主の右の手の聖なる傷です。わたしはそこにずっといたのです、一日中、接吻

と熱い崇拝を繰り返しながら。なん と愛すべきものでしょう、わたした ちの神の聖なる御人性は! 主に願っ てください、わたしにほんとうの愛 をくださるようにと。そうすれば、 わたしの他の愛情もすべて浄められ るでしょう。心よ、十字架の上に! そう言うだけでは十分ではありませ ん。キリストの傷の一つだけでも、 浄め、癒やし、やわらげ、強め、燃 えたたせ、愛でいっぱいにしてくれ るのなら、十字架上の五つの開かれ た傷にできないことなどあるでしょ うか。心よ、十字架の上に! わたし のイエス、これ以上何を望むことが あるでしょう! このやり方で観想を 続けるなら(父でありである聖ヨセ フが導いてくれたのです)、いまだ かつてなかったほど狂ったようにな りそうです。きみも試してみるとい いでしょうし。

しばらく前から、聖ホセマリアは主 の人性やキリストの傷に対する信心

手紙は続けて、この状況下で、この状況下で、この状況下で、この状況下で、の努力につる者たちにいる者を見いいる者にいる者をしていまれたともからいるとはいいるとがある。していまれた。とがあるではないではない。こうを張ってみるのも素晴らしています。

この出来事、この思いがけない照ら しは、聖ホセマリアにとって希望の しるし、司祭としての仕事に邁進から るための活力となりました。神くし をけたこの啓示のが、何度も黙想といたはずのではずの、彼自身がたまが、 きたはずの、にも勧めてった できたはずが、ないきかな見となったの きることのない豊かな泉となったの です――もうそこから離れることな ど考えられないような。

#### 愛に守られて

イエスの傷は、十字架の犠牲によっ て極限まで示されたその愛を、変わ ることなく思い起こさせるもので す。神はわたしたちへの愛を後悔な さったりはしません。だから、その 愛を観想することは、希望の泉とな るのです。復活されたイエスが受難 の傷跡をとどめているのを見て、わ たしたちは悟るのです、「イエスが 身を落としたもっとも低いところ ――それは愛のいちばんの高みでも あります――こそが、希望が芽生え る場です。皆さんの中には《希望は どのように生まれるのですか》と尋 ねる人もいるでしょう。《十字架か ら生まれます。十字架を見つめてく ださい。十字架にかけられたキリス トを見つめてください。そこから皆 さんが受けるのは、決して消えるこ

とのない希望、永遠に続く希望で す》」。だから十字架上で、わたし たちの希望は生まれましたし、常に よみがえるのです。「だからイエス によって、わたしたちのどんな闇も 光に変えられ、どんな失敗も勝利へ と、どんな絶望も希望に変えられる のです。どんなものでもです。そう です。あらゆるものです」<sup>9</sup>。この確 信こそが、パウロをこう叫ばせたの です。「だれが、キリストの愛から わたしたちを引き離すことができま しょう。艱難か。苦しみか。迫害 か。飢えか。裸か。危険か。剣か。 (…) しかし、これらすべてのこと において、わたしたちは、わたした ちを愛してくださる方によって輝か しい勝利を収めています」(ローマ  $8 \cdot 35$ , 37)

自分の弱さや罪を目の当たりにすると、絶望への誘惑がしばしばわたしたちの心に忍び込んできます。あるとき、たぶん調子に乗って、あるい

は誰かに同調して行ったことが、不 意にそれが神に「ノー」と言うよう な愚かしい行為、わたしたちを愛し てくださる神に対する侮辱のように 感じられることがあります。もしも そのとき、生ぬるく煮え切らない気 持ちのままでいると、それが原因で 絶望に陥ることにもなりかねませ ん。それここそまさに、わたしたち を堕落させたあのものからくる一連 の誘惑にほかなりません。そんなと きは、主の傷を観想するのが最善の 応え方となります。主の傷はわたし たちに思い起こさせてくれるので す、主の愛は「死のように強い」 (コリント8・6) ということを。い や、それ以上です、主の愛は死に打 ち勝ったのですから。

ある現代詩人は見事にこう歌っています。「わき腹から流れ出た水に洗われ/その傷のうちに守られているのだ/幾度となく繰り返した無に導くだけの「ノー」からも/幾度とな

く繰り返した生ぬるい「イエス」か らも」<sup>10</sup>。

わたしたちの罪によって傷つき、復 活した主の聖なる人性をあらためて 観想することは、わたしたちにとっ て希望の泉となるでしょう。イエス は、弟子たちに対してもそうなさら なかったように、わたしたちを恨ん だりはなさいません。わたしたちの 罪や弱さ、裏切りを責めたりもなさ いません。反対に、まさにその無条 件の愛ゆえに、わたしたちをしっか りと受け入れてくださるのです。イ エスはわたしたちに「あなたを愛す るのは、あなたがよい行いをするか らだ」とは言いません、むしろこう 言われるのです、「あなたを愛する のは、あなたがわたしの宝だから だ、なにがあろうとそれは変わらな いのだよ」と。主の体に残る開かれ た傷口を観想することから生まれる こうした思いは、わたしたちを喜び と平和で満たしてくれるでしょう。

なにがあろうと、わたしたちはそこ を逃れ場とし、あらためて神に赦し を願うことができるのです。「わた しの人生において、何度となく神の いつくしみの御顔を、神の忍耐を見 ました。わたしはまた、多くの人た ちがイエスの傷に入り込もうとして こう言うのを見ました、《主よ、わ たしはここにいます、わたしの貧し さを受け入れ、あなたの傷の中にわ たしの罪を隠してください、あなた の血でわたしを洗ってください》。 そしてわたしはいつも見てきまし た、神がそうしてくださるのを、受 け入れ、力づけ、洗い、愛してくだ さるのを | <sup>11</sup>。

自分の小ささを認めることは敗北ではありませんし、屈辱でもありません。 をしむ神がわたしたちを支配しようとされる方だとしたら、そうでるのかもしれません。でも、そうではないのです。神を動かすものは変だからです、無条件の愛を、神はわ

たしたちに与えてくださるのです、 わたしたちがその愛を受け入れられ るようにと望みつつ。

#### あわれみの道

主の傷に近づくためには多くの方法 が可能です。「心の動きに従いなが ら近づきなさい | <sup>12</sup>と聖ホセマリア は勧めています。聖ホセマリアが福 音書の場面を想像しながらそこに入 り込むことをどれほど好んでいた か、わたしたちは知っています。た とえば、『聖なるロザリオ』の栄え の神秘の第一の黙想で、こう書いて います。「この一連の祈りが終わる 前に、あなたは主の御足の傷に接吻 する…… そして、幼いゆえにもっと 大胆な私は、主の御脇腹の開かれた 傷口に唇をあてる | <sup>13</sup>。

聖ホセマリアが、その生涯の愛である方との特権的な出会いの場であったミサのあと、感謝の祈りをすると きの様子について、ハビエル・エ チェバリーア司教は思い出をこう語っています。「床やひざまずき台にひざまずき、ポケットから取り出した十字架像を見つめながらEn egoの祈りを唱えました。主の御傷に関する言葉を唱えながら信心を込めてその一つ一つにに接吻していました」<sup>14</sup>。

6月のあの朝、聖ホセマリアがその 深い意味を発見した主の傷は、主が わたしたちに対して抱いておられる 愛を啓示しつつ、わたしたちを招い ているのです、わたしたちも聖母マ リアがそうされたように贖いの協力 者となるようにと、わたしたちもキ レネのシモンとなるように、たくさ んの侮辱で傷ついた主の御心をお慰 めするようにと。なによりもその侮 辱はわたしたちの心も傷つけるので すから…… そう、招きです、この 「小さな兄弟たち」のうちにおられ る主を世話するようにとの招きなの です、主は御自分をこの小さな人た

ちと一体化し、その人たちのうちに とどまることをお望みになったので す(マタイ25・40参照)。

聖ホセマリアをこの新たなる〈地中 海〉の発見――神からの照らし―― へと導いた歩みにについて考えると き、彼がマドリッド郊外にある最も 貧しい地区に住む病人や恵まれない 人たちの世話に多くの時間を費やし たことを忘れてはなりません。確か にこれは、神の愛を発見するための すばらしいやり方なのです。自分の 殻に閉じこもらず、外に出て、苦し む人たちのうちにおられるイエスに 触れるのです。聖ホセマリアにとっ て、それは確かな道だったのです。

この道を行くなら、キリストの招きに応え、キリストの傷に近づき、キリストの優に近づき、キリストの愛に愛をもって答えることができるのです。そうやってわたしたちは、神がわたしたちの弱さに対して示してくださるのと同じ優しさ

をもって、他者と共に生きることを 学ぶのです。この道を歩み続けるこ とによって、わたしたちは自分に与 えられた使命に新たな意味を見出 し、前に進むことができるでしょ う。それも自分自身の力を頼みにす るのではなく、神の呼びかけに身を 委ね、新たにされ、主の平和と喜び の種まき人となるのです。教皇フラ ンシスコは倦むことなくそのことを 力説しています。「時としてわたし たちは、主が受けた傷から用心深く 距離を取ったキリスト者であろうと する誘惑を覚えることがあります。 しかしイエスは、人間の悲惨に触 れ、苦しむ他者の身体に触れるよう 望んでおられます。 (…) それを実 行すれば、わたしたちの生は多彩 で、つねにすばらしいものとなりま す。民であることを、民に属するこ とを強く体験するのです | 15。

キリストの傷に入り込み、あわれみ と観想の道を進むなら、わたしたち の前にはまぎれもない新たなる〈地中海〉が開けてくるのです。そしてわたしたちは学んでゆくのです、愛の傷に逃れ場を求め、身近にいる人たちを一一それもまず、わたしたちのすぐ近くにいる、とくに困っている人たちを一一心から愛することを。

- 1 教皇フランシスコ「ヨハネ二十三世、ヨハネ・パウロ二世列聖式説教」2014年4月27日[『教皇フランシスコ講話集2』カトリック中央協議会、ペトロ文庫、2015年、128-129ページ]。
- 2 聖ベルナルド、説教61 (雅歌について)、4。
- 3 アビラの聖ヨハネ、手紙47、雅歌2参照「この歌の中で、若者が恋人

であるおとめを「わたしの鳩」と呼んでいます]。

- 4 San Josemaría, Apuntes íntimos, n. 1799b, de 1933, en Santo Rosario. Edición crítico-histórica, Rialp, Madrid 2010, comentario al primer misterio glorioso, p. 226, nota 5.
- 5 「わたしは毎日、以前決心したことを守るために、主のわき腹の傷の中に入るのです」。 San Josemaría, Apuntes íntimos, n. 1763, de 1934; en Camino. Edición crítico-histórica, Rialp, Madrid 2004, 3ª ed., comentario al n. 288.
- 6 San Josemaría, Carta a Juan Jiménez Vargas, 6-VI-1938, en A. Vázquez de Prada, El Fundador del Opus Dei, vol. 2, Rialp, Madrid 2002, 288-289.
- 7 同上。

- 8 教皇フランシスコ、一般謁見講話、2017年4月12日[『キリスト者の希望――教皇講話集』カトリック中央協議会、ペトロ文庫、2018年、108ページ]。
- 9 同上 [同、109ページ]。
- 10 Julio Martínez Mesanza, "Defendido", en Gloria, Rialp, Madrid 2016.
- <u>11</u> 教皇フランシスコ、説教、2013 年4月7日。
- 12 聖ホセマリア『神の朋友』303 [前掲邦訳、382ページ。ただし原 文に合わせて訳し直しました]。
- 13 聖ホセマリア『聖なるロザリオ』栄えの神秘、第一の黙想 [改訂第6版、精道教育促進協会スタッフ訳、精道教育促進協会、2003年、68ページ。なお、原文に合わせて一部を訳し直しました]。

14 ハビエル・エチェバリア『聖ホセマリアの思い出』 [非売品の私家版として、出版者名・出版年・翻訳者名も記されず、簡単な装丁で製本された邦訳があります。引用箇所は122ページにあります]。

15 教皇フランシスコ、使徒的勧告 『福音の喜び』270 [前掲邦訳、227 ページ]。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/aratanaru-chichukai-3/(2025/12/18)